

過去と対峙すること―「彼の若き日の妻」における奴隷制と上昇志向

平沼 公子

はじめに―南北戦争後、ハーレム・ルネサンス前

アフリカ系アメリカ文学史において、合衆国再建期の終わりから第一次世界大戦までの期間は、これまでハーレム・ルネサンスの準備期間として捉えられ、その位置づけにおいて語られることが多かった。たしかに、数々の奴隷体験記を生んだ奴隷制時代から南北戦争時代、またアフリカ系アメリカ人の芸術の開花として名高いハーレム・ルネサンスの間に挟まれた、概ね一八六五年から一九一九年までの間は、文化芸術の分野においては主張が少ないように思われるかもしれない。また史実においては、ジム・クロー法の浸透、クー・クラックス・クランの組織・台頭およびリンチの横行、それに伴うアフリカ系アメリカ人の南部から北部への大移動など、この時期はアフリカ系アメリカ人にとって困難の連続であった。そのため、この時期は「アメリカにおける人種関係のどん底 (The nadir of American race relations)」¹と呼ばれ、新たな時代の到来を予測するような華々しさは見出せず、ふたつの重要な時代の中に挟まれた試練の期間として位置付けられてきたことに不思議はないだろう。

チャールズ・W・チェスナット (Charles W. Chesnutt) は、この「南北戦争後、ハーレム・ルネサンス前 (Post-Bellum, Pre-Harlem)」に活躍した作家だ。そもそも、この「南北戦争後、ハーレム・ルネサンス前」という言い回しは、まさにチェスナットが自分自身を表現するために用いたものであるが、そこにはこの期間のアフリカ系アメリカ人の社会芸術活動に対する嘆息と、自身の作家としての立ち位置に対する自嘲的な姿勢が見てとれる。² この宙吊りの期間は、合衆国再建の功罪を通して人種問題が新たな局面を迎

える重要な時期であり、チェスナットの作品群は、その渦中における社会的・歴史的な存在としてのアフリカ系アメリカ人たちの葛藤を描いている。しかしながら、第二次世界大戦後にアフリカ系アメリカ文学がその総体として批評と文学史を生成していく中で、前後の期間をつなぐ期間として「南北戦争後、ハーレム・ルネサンス前」はトーンダウンして語られるようになった。

本論は、この「南北戦争後、ハーレム・ルネサンス前」という宙吊りの期間が、アフリカ系アメリカ人の人種観形成に重要な期間だったという前提に立った上で、チェスナットが 1898 年に『アトランティック・マンズリー』誌に発表した短編「彼の若き日の妻 (The Wife of His Youth)」におけるアフリカ系アメリカ人の上昇志向と、奴隷制の過去の関係について考察するものである。「彼の若き日の妻」は、アフリカ系アメリカ人コミュニティ内における、肌の色の濃淡とその社会政治的意義に言及する作品だ。出版当時、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells) に高く評価された³本作品は、混血のアフリカ系アメリカ人、つまりムラートとして特権階級に属する肌の色の薄い主人公が、自分の出自一元奴隷ではないが、南部出身で奴隷とともに労働に従事していた人間であること—にどう向き合うかという問題を扱っている。このムラートのアメリカ社会における立ち位置をめぐる葛藤というテーマは、ハーレム・ルネサンスのパッシング文学を読んできた現代の読者にとって特に印象的ではないかもしれない。さらに本作品は、結婚をモチーフとして語られる掌編なため、時には安っぽさを感じる読者もいるかもしれない。その証拠に、本作品についての先行研究は少なく、作中の聖書からの引喩を詳細に分析したものや⁴、本作品の出版史にまつわるものなどはあるが⁵、本作品の内容についての詳細な分析は行われてこなかった。しかし本作品は、アフリカ系アメリカ人コミュニティ内における肌の色の濃淡に基づく差別であるカラリズム (Colorism) が、いかに南北戦争後のアメリカ社会において機能してきたかを指摘し、その根底にある奴隷制という過去にアフリカ系アメリカ人がいかに向き合うべきかと問いかける、難しい命題に取り組むものだ。

本論は、「彼の若き日の妻」が、アフリカ系アメリカ人たちの肌の色の濃淡の差を巡るカラリズムを、奴隷解放宣言を経た合衆国再建期以降のアフリカ

系アメリカ人たちの上昇志向との関係から描いていることを明らかにする。本作品におけるムラート社会と、それに対比される元奴隷の表象は、作品の舞台であり、作家の執筆当時の「南北戦争後、ハーレム・ルネサンス前」期間における人種内の分断を読者に提示するだろう。その上で、上昇志向を持つムラートたちが切り捨てようとしている奴隷制の過去が、いかに物語の中に立ち現れるかを分析することにより、本作品が「過去を捨て去ることの問題」にどのように取り組んでいるのかを考察する。「彼の若き日の妻」は、アフリカ系アメリカ人コミュニティ内の人種意識において、過去と対峙することがどのような意味を持つのかを問いかける作品なのだ。

「生き延びる」ための上昇志向

はじめに、「彼の若き日の妻」のあらすじを簡単に紹介しよう。主人公ライダー (Mr. Ryder) は、北部のとある都市にある「ブルー・ヴェインズの会」(the Blue Vein Society) という会の重鎮だ。ブルー・ヴェインズの会は、その名の通り、「静脈が透けて見える」(101) ほど肌の色が薄いアフリカ系アメリカ人たちの集まりであり、その目的は「ある種の人々の間に正確な社会水準を創出し維持する」(101) こと、つまりムラートの社会的地位の向上にある。ライダー氏は、会の立ち上げメンバーではないにしろ、初期の頃からの会員であり、その発言や行動力によって一目置かれる存在だ。彼は女性会員からも大変人気があったが、なぜか独り身を通して。しかし、ディクソン夫人 (Mrs. Dixon) という未亡人が会に入会してから、二人は互いに惹かれ合い、周囲からもお似合いのカップルになるだろうとされてきた。ついにライダーはディクソン夫人に結婚の申し出をしようと心に決め、それに最良の場として舞踏会を開くことにする。舞踏会の用意も大方整った当日の昼下がり、ライダーのもとにやってきたのは、真っ黒な肌を持つ老女ライザ・ジェーン (Liza Jane) だ。ライザは、生き別れとなってしまった夫サム (Sam) を探しているという。実はこのライザの生き別れの夫こそ、ライダーなのであった。過去を捨て、ディクソン夫人との未来への一歩を進めようとする当日に現れた、自身の若き日の妻ライザに、ライダーはどのような態度をとるのだろうか、というのが本作品の最大の山場である。

ライダーの決断についての分析は本論の後半で行うが、まず、本作品の理解のために、アフリカ系アメリカ人コミュニティ内における肌の色の濃淡に対する意識と、それに関連した上昇志向について、当時の社会的背景を踏まえて明らかにすることが必要だろう。本作品は、第三者の視点から物事を見守る語り手が語る形式を持つが、その語り手が説明するには、ライダー氏の属するブルー・ヴェインズの会は、「あの戦争（南北戦争）のすぐ後にとある北の街に集まった有色人からなる小さな会」（101）である。会員である肌の色が薄いアフリカ系アメリカ人、いわゆる混血のムラートたちはブルー・ヴェインズ（the Blue Vains）と呼ばれるが、この名称は会員たちが自称したわけではないし、「彼らの会に入るために必要な条件があることを認めてはいなかった」（101）とされている。しかし語り手はまた、そのように表面的には肌の色の濃淡による差別意識はないとするブルー・ヴェインズの会が、実際には社会階級意識を持っている人々によって組織されていることを、その語りによって指摘する。彼らは、入会するには、「性格と教養（character and culture）だけが判断要素である」（101）としつつも、「もしメンバーの肌の色が薄いのであれば、それらの人々は、概して、メンバーになる資格をもつためのより良い機会があったからというだけ」（101）だとするのだ。また、南北戦争以前に自由黒人であったという条件も存在しないとしつつも、その条件があったならば「条件を満たせない人は、間違いなく、ほんのわずかでもあった」（101-2）。だからして、ブルー・ヴェインズの会は「偶然にも、何かしらの自然な傾向と相まって」（101）、どちらかといえば「肌が黒い人間たちよりも、白い人間たちによって」（101）成り立っていたのである。

語り手の仰々しい言い回しは、ブルー・ヴェインズの会が体現する肌の色の薄さに対する選民意識を浮き彫りにする。奴隷解放宣言後のアフリカ系アメリカ人は、奴隷もしくは自由黒人という従来の身分の差が無くなり、合衆国の社会経済構造への組み込まれ方が変化した。のちに「ペーパー・バッグ規範（Paper Bag Principle）」として知られる肌の色の薄さについての人種内における差別意識—カラリズム（Colorism）—は、肌の色の濃淡によって社会的地位が変わるといふ、白人優位社会であるアメリカにおける人種間の抑圧構造が、アフリカ系アメリカ人コミュニティに内面化されたものである。

6 「彼の若き日の妻」において混血のアフリカ系アメリカ人たちによって組織されるムラート社会の存在と、その社会的な立ち位置、機能は、このカラリズムの存在を読者に突きつける。もちろん、社会政治的なさまざまな抑圧を考えれば、こうしたアフリカ系アメリカ人たちの動向を単純に批判することはできない。ここで重要なのはむしろ、アフリカ系アメリカ人コミュニティ内におけるカラリズムを、「彼の若き日の妻」が真っ向から描いていることであり、「南北戦争後、ハーレム・ルネサンス前」時代の彼ら・彼女らの問題を人種コミュニティの内側から照射している点である。その意味において、「彼の若き日の妻」は、「血の一滴のルール (One Drop Rule)」を軸に、肌の色の濃淡により生じる社会的な状況について描いているにもかかわらず、いわゆる「パッシング」文学—アフリカ系アメリカ人が、肌の色の浅さを逆手に取り、白人として身分を偽ることを巡る作品—ではない。パッシング文学においては、白と黒の分断、白人に対する黒人という対立構造の中に、白人優位社会における悲劇のムラートという抑圧のテーマが描かれる。しかし、本作品は、あくまでアフリカ系アメリカ人コミュニティ内で完結しており、まさにその点において、アフリカ系アメリカ人たちが一枚岩ではなかったという居心地の悪さが浮かび上がるのだ。

そしてこの居心地の悪さは、本作を理解するのに重要なもうひとつの概念である、上昇志向と深く関係している。語り手は、ライダー氏がいかにブルー・ヴェインズにおいて熱心に活動してきたかを読者に説明した上で、昨今のブルー・ヴェインズの会は、入会者たちに対して寛容さが過ぎるのではないかと彼が危惧している心情を説明する。語り手は、ライダーは「私に人種偏見はない」(104) と言うだろうと前置きしつつ、ライダーの論理を披露する。

だが私たち混血の人々は、挽き白の上下の石の間の場である。私たちの運命は、白人種に吸収されることと黒人種の中で死滅することの間にある。一方は私たちが未だ望まないが、時が経てば受け入れてくれるかもしれない。もう一方は、私を歓迎してくれるだろうが、私たちにとっては後退を意味するのだ。「誰に対しても悪意なく、全ての人に博愛の心

を抱きつつ」、私たちは私たちとそれに続く人たちのためにできるかぎりのことをしなくてはならない。自己保存こそは、自然の第一法則である (Self-preservation is the first law of nature.)。 (104)

ここで語り手は、ライダーの持つ思想を、ライダー自身であればこう語るだろうという体にて読者に紹介している。語り手によるライダーは、人種偏見はないとしつつも、自身らムラートを白人種と黒人種の間にいる者たちとみなした上で、自分達の運命がどちらかへ属することだとしている。その上で、黒人たち、つまり自分達よりも肌の色の黒いアフリカ系アメリカ人たちへの仲間入りをすることを「後退」だとしている。ここで重要なのは、ライダーの論理が単なる肌の色の濃淡によって種の優劣を決定するものではないことだ。ダーウィンの進化論に一度は心酔したものの、のちに反対の意を示したサミュエル・バトラー (Samuel Butler) の語を引用する語り手は、ライダーの思想が進化論とその議論に影響を受けたものだと示唆している。⁷ 一見白人迎合的であり、人種間に序列をつける点において差別意識そのもののように思われるライダーの論理は、「死滅」を避けるために「できるかぎりのこと」が、自分達ムラートが白人に近づくべく努力することであるとしている。ムラートの運命を、バトラーの言葉でいう「自然の法則」と結びつけて結論づける語彙の選択からは、差別意識として表出するものの根底には、アメリカ社会において「生き延びる」ための上昇志向という切実さが透けて見えるのだ。

立ち戻る過去とどのように対峙するか

ライダーの上昇志向が、バトラーの議論と結びつくのが偶然ではないのは、本作品が結婚をめぐる物語であることとも関係している。「彼の若き日の妻」は、ライダーがディクソン夫人に婚約を申し込む当日を舞台とするが、そこには「ブルー・ヴェインズの色白な者たちよりは、白くはない」(102) ライダーが、舞踏会参加者のなかで「最も色白な女性」(105) であるディクソン夫人との間に種を残すこと、より白い次世代の創出が示唆されている。「ディクソン夫人との結婚は、彼が望み、待ち焦がれている吸収という上向きの進

展を助長するはず」(105)なのである。舞踏会の準備が整いつつある昼下がりには、ライダーはプロポーズの予行演習として、アルフレッド・テニソンの詩集を開き、“A Dream of Fair Women”を朗読するが、その朗読の最中に彼の元を訪れるのは、小柄な老女ライザである。彼女の特徴を、語り手は以下のように説明する。

その黒さは、話をする時に開いた口の中に見える歯無しの歯茎が赤ではなく、青であったほどだった。彼女は、古めかしいプランテーションでの生活を感じさせる風貌だった。それはまるで、魔法使いの杖から出る波動で過去から呼び起こされたか、あるいは彼の読んでいた詩人の幻想が神の恵みを受けて形を帯びたようだった。(105)

ライザは、その肌の色の黒さ以外にも、元奴隷という出自、そして話しぶりが露呈する無教養さから、ブルー・ヴェインズの会員からは程遠い。ライザは自身の来訪の理由を以下の通り説明する。

「モウシ訳ございませんが、私、私の夫をサガしております。あなた様はこの辺のオ偉方で、長い間ここにご在ジュウでいるとオキキしました。もし私がここに来て、あなた様に私の夫をタズねても、おキになさらないとカンガエまして。サム・テイラーというナマエのムラートの男が、「リザ・ジェーン」という彼の妻を探しキョーカイに出向き、人々に聞き回っていたということをおキキになったことがゴザイますか。

(“‘Scuse me, suh,” she continued, when she had sat down on the edge of a chair, “‘scuse me, suh, I’s lookin’ for my husban’. I heerd you wuz a big man an’ had libbed heah a long time, an’ I ‘lowed you wouldn’t min’ ef I’d come roun’ an’ ax you ef you’d eber heerd of a merlatter man by de name er Sam Taylor ‘quirin’ roun’ in de chu’ ches ermongs’ de people fer his wife ‘Liza Jane?’”)(106)

このサム・テイラーは、かつてのライダーだ。ライダーは、南部で自由黒人

であったが、身寄りがなかったため、黒人奴隷と共にプランテーションで働いていた。ライザは、年下でムラートのサムと奴隷結婚をするが、ある日金策に困ったプランテーションの奴隷主が、自由黒人であるサムを騙して売ろうとしているという噂を聞きつけ、サムに北部へ逃げるように促す。二人は再会を誓うが、サムを逃したことによって、ライザは深南部に売られ、その後南北戦争が起こったことにより、二人は離れ離れのまま二十五年間もの月日が流れた。ライザは、この間常にサムを探し続けていたというのである。

ライザの来訪は、ライダーに彼自身が捨て去ろうとしている過去を突きつけるものだ。「魔法使いの杖」でプランテーションから召喚されたライザは、ライダーのいかなる質問に対しても、夫への忠誠心を貫く。ここで語り手は、ライザの肌の黒さに誠実さを重ね合わせることによって、肌の色の薄いライダーの不誠実さと対比させている。さらにまた、ライダー自身や、彼が恋心を寄せるディクソン夫人とは正反対の見た目を持つライザが、黒すぎるが故に「青く見える歯茎を持つ」という表現は、彼女がブルー・ヴェインズたちと異なることのない、同じアフリカ系アメリカ人、同じ人間たちであることを示唆するだろう。ライダーは、ライザが常に持ち歩いていたサムの古いダゲレオタイプの写真を見せてもらうが、語り手はそれを「時間によって色褪せてはいたが、特徴はまだはっきりとしていて、写真が示す男性の様子が容易に理解できた」(108)と説明する。ライダーが写真の中に見出したのは、色褪せ、過去のものとなっただけではあるが、それでも自分だと認識できる、自己の若き日の姿である。

青天霹靂の邂逅ののち、ライダーはテニソンの詩集にライザの居候先の住所を書き留めることで、ディクソン夫人とライザを重ね合わせた上で、「鏡の前に長時間立ちつくし、彼の顔が映った姿を物思いに見つめ」(109)、自身の現在の顔の内に、過去が見出せるのかを思案する。ライザを自身の若き日の妻として認めることは、自身がサムであった過去を認めることであり、ディクソン夫人との結婚を諦めることであり、それはつまり、生き延びるための上昇を捨てるということだ。反対に、ライザを認めないということは、上昇するために自身の過去を切り捨てるということである。ライダーが置かれた状況は、彼の個人的な人生の局面であると同時に、アフリカ系アメリカ人

たちがアメリカ社会においてどのように生きていくかという、より大きな問いを投げかけているのである。

過去を捨てない選択の意味 ライダーの決断

物語は、ライダーが自身の若き日の妻であるライザを認知するという決断で幕を閉じる。舞踏会でスピーチを求められたライダーは、その日の午後の来訪者ライザの話を語った上で、「あるケースを想像した」(111)と述べる。ライダーは、ライザの夫について、「～～だとしたら(“Suppose that...”)」と繰り返し、仮定を積み上げていく。ライザの夫がムラートだったとしたら、ブルー・ヴェインズの会のような会に所属し、社会的地位を確立していたとしたら、二五年もの月日が経つうちに奴隷制時代の記憶は色褪せ、たまたに夢に見るだけになっていたとしたら、かつての若き日の妻、「彼に付き添い、彼の立身出世への奮闘を支えてきた人ではなく、加齢と人生の苦難が痕跡を残しているような人(not one who had walked by his side and kept pace with him in his upward struggle, but one upon whom advancing years and a laborious life had set their mark)」(111)が生きていて、目の前に現れたとしたら、ライザの夫であった男はどうしたら良いだろうか。ライダーの問いかけは、彼とライザの問題であると同時に、アフリカ系アメリカ人の過去である奴隷制という負の遺産に、自分達はどのように向き合うのかという問いかけだ。ライダーが、「彼らの結婚は奴隷結婚であり、法的な意味では拘束力がない」(111)という点を指摘しているのは重要だろう。結婚という規範自体が許されない抑圧構造に組み込まれていたアフリカ系アメリカ人たちにとって、その抑圧の記憶自体が負の遺産である。ライザを認めることが困難であるのは、自分達が人間として扱われてこなかったという事実さえも含めて過去と直面する、痛みを伴う作業だからなのである。

ライダーは、自分自身がこのライザの若き日の夫から相談を受けたと仮定し、その彼にどのような助言をしたら良いのか考えた、とスピーチを続ける。ここでライダーは、ライザの写真に見出した自分と、鏡の中に見出した自分の二人を対話させるのだ。最終的にライダーは、ライザの若き日の夫に、シェイクスピアのハムレットから「何より肝心なのは、己に誠実であること

(This above all: to thine own self be true)」(112) と引きつつ、「彼女を認
知すべきか？」と問いかけるのである。そしてこの問いは、舞踏会に集まっ
たブルー・ヴェインズたちへの問いとして投げかけられる。この問いに最初
に「彼は彼女を認めるべきです」(112) と応答したのは、涙目のディクソン
夫人であり、それに続くように、会員たちは彼女を認知すべきだと声を合わ
せて応えるのだった。物語の最後で、ライダーは以下のように自身の過去と
現在を重ね合わせる。「この方がその女性、私とその男性で、つまり今私が皆
様にお話しした者たちです。紹介をすることをどうかお許してください。彼女
が私の若き日の妻です。」(112) こうして紹介されたライザは、灰色の服を
着た老女だ。煌びやかな舞踏会の輝きに怯える彼女は、奴隷制の過去という
負の遺産を体現すると同時に、ブルー・ヴェインズの会にとっては、その過
去を自分たちのものとして認めることによつてのみ獲得しうる、誠実さを示
唆する。ブルー・ヴェインズの会が、その入会に肌の色の濃淡は重要ではな
く、性格と文化が重要であると掲げるのであれば、この「女性を最も特徴づ
ける資質」(110) だとライダーが述べる「愛する人への貞節さであり献身さ」
(110) の具現であるライザを認めないことは、会の在り方の根幹を揺るが
すこととなるのである。「彼の若き日の妻」から、「私(ライダー)の若き日
の妻」となったライザは、合衆国におけるアフリカ系アメリカ人にとって、
奴隷制の過去と対峙し、その負の遺産を自分たちの歴史として認め、意味を
捉え直すことの重要性を提示しているのだ。

おわりに

「彼の若き日の妻」を、パッシング文学同様に、ムラートの置かれた境遇
についての悲劇的、あるいは英雄的な物語として捉えることは容易い。しか
しながら、語り手の語りを通したライダーのカラリズムが、どのような背景
からくるのか、その問題を分析することによって、本作品が提示するより複
雑な「南北戦争後、ハーレムルネッサンス前」のアフリカ系アメリカ人たち
の心情と状況が浮かび上がるのである。さらに、この奴隷制の過去とどう対
峙するかという問題は、世紀転換期以降のアフリカ系アメリカ人の文化芸術
においても継続する大きな命題である。のちに『彼の若き日の妻、およびカ

ラー・ラインにまつわる掌編集 (The Wife of His Youth and Other Stories of the Color-Line)』にタイトル作として収録される「彼の若き日の妻」は、ライザを認知したライダーが、ブルー・ヴェインズの会員たちから、その後どのように受け止められるのかを、読者に明かさない。チェスナットは、世紀転換期以降の議論を予言しつつ、奴隷制の過去とどのように対峙すべきかを、読者それぞれに問いかけるのである。

注

1. ノートン版『アフリカ系アメリカ文学全集』における「合衆国再建期からニュー・ニグロ・ルネサンスまでの文学, 1865-1919」を参照のこと。
2. チェスナットの発言については、Barbara McCaskill らを参照のこと。チェスナットは、アフリカ系アメリカ人作家としての自身の将来に希望を持つことができずに作家業を辞したが、その際に自分の置かれた立ち位置に関してこのように言及したとされている。
3. 1900年に発表されたハウエルズのレビューは、『アトランティック』誌のオンライン版にて参照可能である。
4. Earle V. Bryant を参照のこと。
5. 中村久男を参照のこと。
6. Audrey Elisa Karr を参照のこと。ペーパー・バッグ規範とは、“Brown Paper Bag Test” などとも呼ばれ、肌の色が薄茶色の紙袋よりも薄ければ、美しいとみなされ、社会的な成功を収めやすいとされるアフリカ系アメリカ人に対する差別的な見方、カラリズムである。チェスナットが執筆していた時期にすでに問題化していたカラリズムだが、元を辿れば奴隷制下においても色白な奴隷が屋内で家事に従事する奴隷として歓迎される傾向があったなど、合衆国の歴史上の根深い問題でもある。
7. サミュエル・バトラーについては、清宮倫子を参照のこと。

文献目録

- Bryant Earle V. "Scriptural Allusion and Metaphorical Marriage in Charles Chesnutt's "The Wife of His Youth." *American Literary Realism*, Vol.33, No.1. 2000, pp. 57-64.
- Chesnutt, Charles. "The Wife of His Youth." *Charles W. Chesnutt: Stories, Novels, and Essays*, edited by Werner Sollors, Library of America, 2002, 101-12.
- Gates, Jr., Henry Louis. and Valerie A. Smith. *The Norton Anthology of African American Literature*. 3rd edition. Vol. 1. Norton, 2014.
- Howells, William Dean. "Mr. Charles W. Chesnutt's Stories: A review." *The Atlantic*, 1900.
- Karr, Audrey Elisa. *Paper Bag Principle: Class, Colorism, and Rumor and the Case of Black Washington, D.C.*. U of Tennessee P, 2006.
- McCaskill, Barbara. and Caroline Gebhard. *Post-Bellum, Pre-Harlem: African American Literature and Culture, 1877-1919*. NYU P, 2008.
- 清宮倫子. 『ダーウィンに挑んだ文学者—サミュエル・バトラーの生涯と作品』, 南雲堂, 2010年
- 中村久男. 「カラー・ラインへの挑戦 —チャールズ・W・チェスナットの *The Wife of His Youth* の編み方—」, 『言語文化』, 同志社大学言語文化学会, 8 (2), 261-284, 2005年.